

税理士事務所 訴訟時代の生き残り術

クローズアップ

～税法以外の法律も、味方、にする～ 執筆：鳥飼 重和 弁護士

第18回 恐慌が来ても「しゃんとする」

登場人物



早川小百合

税理士。税理士事務所に勤務した後、税務関係を専門分野のひとつにしている三田総合法律事務所に移籍した。好奇心が強く、遠慮なく質問や意見を言う性格。



三田弁護士

三田総合法律事務所の代表弁護士。数多くの税務訴訟・税理士賠償責任訴訟を担当し、税理士界をよく知っている。裏表のない率直な性格で、「何があっても上り坂」が信条。



消費税の増税をめぐる話し合いの中で、民主党が分裂しました。経済状況が非常に悪い状態が続いているのに、しっかりしてもらわなければいけない日本の政治が混迷の度を深めています。



世界の政治状況も同じようなものだ。ギリシャやスペインのソブリンリスク(信用リスク)の問題があっても、それを解決すべき先進諸国の政治が迷走している。



最近の世界情勢は「1929年から始まった恐慌に似てきている」という説があるそうです。1929年時の恐慌は、世界全体の問題と捉えて各国の協力で解決すべきところを、それぞれが自国のことだけ考えるモンロー主義の考え方に立ったのが問題でした。



リーマン・ショックの時も、世界の経済・金融全般の問題だから新興国を加えたG20で乗り越えようとした。それは、先進7カ国のG7だけで話し合うよりは良いことだっただろう。でも乗り越えきれなかったね。G20で各国が思い切った財政出動をしたけど、それは民間の巨額な債務を政府が肩代わりしただけだ。つまり問題の中核の巨額な債務は残っている。



その巨額の債務がソブリンリスクの根源ですね。



うん。そして今回の危機は、リーマン・ショックの時よりひどいことになる可能性が高い。



どういった理由からでしょうか。



リーマン・ショックの時は、先進諸国・新興国は思い切った財政出動ができた。だから二番底になるのを防げた。しかし今回は、各国は巨額の政府債務を負っているから思い切った財政出動ができない。財政出動できない以上は金融緩和で対応しようとするのだから、景気が悪いなかで、民間だけで需要を増やすのには限界がある。



今度は二番底の可能性はあるのですか？



そうだね。今は先進諸国も新興国も、世界全体のために尽力する余裕はない。自国のことを考えるので精いっぱいな感じがする。「反グローバリズム」の流れだ。



それって、1929年以降の恐慌の引き金を引いたモンロー主義と同じことです。



そのとおり。危機管理の観点からすれば、最悪の場合を考えて、恐慌の可能性があると考えた方がいいかもしれない。それと、米国から始まった1929年以降の恐慌だけど、その2年半後にヨーロッパ発の世界大恐慌があったことも忘れてはいけない。



われわれが置かれている状況と関係があるわけですね。



1929年10月にNY株式市場が暴落して、米国の銀行が倒産の連鎖でバタバタ倒れ、金融システムが停止し、米国経済が恐慌に陥った。この段階では米国だけの恐慌だけど、1931年5月にオーストリアやドイツの大銀行が破たんし、さらに8月にドイツのすべての銀行が閉鎖された。そのうえ、イングランド銀行が金本位制を停止したのでパニックとなって世界大恐慌になった。このように恐慌が「2段階」になっているといえることにも注目すべきだ。ここにも、われわれが置かれた現状との類似性が指摘されている。



2008年9月のリーマン・ショックは確かに米国発の大不況でした。この後、ヨーロッパ発の世界大恐慌が来るということでしょうか。



現状で世界的な問題となっているのは、ギリシャ、スペインという欧州におけるソブリンリスクだ。1929年以降の恐慌とやっぱり似ている気がするんだ。



歴史は繰り返すということでしょうか。



そうならないでほしいけどね。この流れを止めるため、世界の賢人たちは歴史の教訓を思い出して、知恵を絞って対応してもらいたい。



現状の政治の混迷ぶりから見ると、賢人の登場は期待できないようにみえます。悲観的になりたくはないのですが……。



同感。そこでわれわれは、最悪の事態が来てもそれを乗り越える心の準備しておく必要がある。小百合ちゃん、学問とか教養の意味をどう捉える？



三田先生は実学重視の考え方ですから、「学問や教養は今の学校教育とは関係ない」とおっしゃるのでしょね。わたしもそう思います。



そのとおり。学問も教養も、人間の態度とか心構えのことを指している。結論を言えば、どのような事態に直面しても動じない態度・心構えをつくるのが学問であり、そのような態度・心構えがあることが教養のある人だと思う。



世界大恐慌が来てもうろたえないで、それに立ち向かえるようになることが学問であり、そのような態度を身につけた人が教養のある人ということですね。



スタインベックの『怒りの葡萄』にためになる言葉がある。ここに学問・教養のエッセンスがあると思う。その言葉とは、「どんな不幸だって、男たちさえしゃんとしているなら、決して耐えられないほど大きくはない」というもの。「しゃんとしている」というのは、どんな不幸にも動じない態度だ。



しゃんとした態度があれば何とかなる、ということですか？



スタインベックもそのことを指摘している。男たちのしゃんとした態度を見て、女たちがどう思ったかを「女たちは、これで万事大丈夫だと知っていた」と描写している。



不幸に挫けずに立ち向かおうとする人の姿を見れば、確かに「この人なら大丈夫」「何とか不幸を乗り越えてくれる」と直感的に思えるでしょうね。逆に、最悪の事態を想定していない人は想定外のことに驚き、翻弄されて、何が何だか分からなくなって、他人から見ると信頼できない気がします。



今から最悪の恐慌が来るかもしれないと想定し、恐慌が来ても、それに驚かず、挫けず、それに立ち向かう姿勢をとれるように心の準備をする。そうすれば、どういう態度をとればいいのか分からない人と違った状態でいられるよ。



税理士先生も、顧問先にそのようなことが伝えられたらいいと思います。



顧問先の経営者の受け止め方があるから「相手を選ぶ」ということは必要かもしれないけど、少なくとも最悪の恐慌が来た時にあたたかたたくはないね。

(つづく)